

シャイバーン朝の再興

堀川 徹

ムハンマド・シャイバーニー・ハーンに率いられた遊牧ウズベク族は、一五〇〇年のサマルカンド占領を皮切りに、マー・ワラー・アンナフル、ホラズム、ホラーサーンを席捲してティムール朝を滅ぼし、所謂シャイバーン朝を建設した。しかしながら、一五一〇年にマルウ郊外でシャイバーニーが敗死したのを機として、シャール・イスマールの援軍を得たパーブルの進撃の前に、ウズベク勢力はシル・ダリヤ中流域のトゥルキスターン地方へ一旦後退することゝを餘儀なくされた。一五二二年の春、ウバイドゥッラー・スルターン率いるウズベク軍は、ブハーラー郊外にパーブル軍を破って再びマー・ワラー・アンナフルを奪還する。再建されたシャイバーン朝は十六世紀末に至るまでこの地を支配するが、本發表では、その再建の過程を追いつつ、中央アジア支配の體制について、とくに、ウバイドゥッラー政権のそれについて考察してみたい。

ティムールとキシム

加藤 和秀

ルに展開された激しい政争は、トルコ系諸部族が在地の農耕定住社會の政治的・社會的・文化的諸條件に規定されつつ、その支配的地位を維持すべく自らを再編成していく過程であった。その過程はモンゴルによる中央アジア支配の限界の克服という、いわば歴史的要請に基づくものであり、一三七〇年のティムール政権の成立はそれへの一つの解答であったと言える。この意味においてティムール政権成立の歴史の意義は、先ずなによりもモンゴル支配との相違に見いだされるべきであり、具體的にはその支配権力や支持基盤、あるいは在地社會との結び付きといった諸相の特質の究明を通して明らかにされうるのであろう。

従来、モンゴル支配層の再編過程について述べられることはあつても、ティムール朝のモンゴルの「繼承國家」としての面が強調される傾向が強く、兩者の相違については必ずしも明確にされては來なかつた。近年、関野英二氏が、ティムール政権の成立によつて舊來の部族制に基づく支配階級にかわつて、君主との個人的なつながりに基盤を持つ新たな支配階級が生み出されたことを明らかにしたことは、この課題究明への大きな前進であつた。本發表はこの関野氏の見解を引き継ぎながら、ティムールの支持基盤について特に彼の出身地であり彼の所屬したバルラス部族の根據地でもあつたキシム地方との關係に焦點を當てて再検討し、ティムール政権の特質の一端を明らかにしようとするものである。